

# 市民組織の活動形態に着目した 参加動機の特徴分析

長曾我部 まどか<sup>1</sup>・桑野 将司<sup>2</sup>・谷本 圭志<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 鳥取大学助教 工学部社会システム土木系学科 (〒680-8552 鳥取市湖山町南4-101)  
E-mail: mchoso@tottori-u.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 鳥取大学教授 工学部社会システム土木系学科 (〒680-8552 鳥取市湖山町南4-101)  
E-mail: kuwano@tottori-u.ac.jp

<sup>2</sup>正会員 鳥取大学教授 工学部社会システム土木系学科 (〒680-8552 鳥取市湖山町南4-101)  
E-mail: tanimoto@tottori-u.ac.jp

人口減少、高齢化、自然災害リスクといった課題を抱える地域社会において、市民組織の重要性が高まっている。しかし、市民組織自体が人材不足などの課題を抱えている場合も多い。組織の構成員や活動への参加者を継続的に確保し、組織を維持するためには、組織の活動形態と参加の実態、参加動機との関係を明らかにする必要がある。そこで本研究は、活動形態の異なる複数の組織に対し実態調査を行い、活動への参加動機の特徴を因子分析によって分類した。さらに、自己組織化マップとクラスター分析を用いて、参加者の特性を分類することによって、活動内容や形態の違いによる参加動機の違いを明らかにした。分析の結果、多様な参加動機に基づいて活動が行われている組織と、参加動機が乏しい組織が存在することが明らかになった。

**Key Words** : factor analysis, self-organizing map analysis, Community-Based Organization, Volunteer Organization

## 1. はじめに

地域社会における助け合い、ボランティア活動の必要性が高まっている。2011年の東日本大震災では、災害時における地域内の「共助」の重要性が再認識され、自主防災組織の立ち上げや地域住民による防災マップの作成が促進されている。一方で、小規模・高齢集落では、地域内の支え合いには限界があり、地域外からの災害ボランティアの支援も不可欠である。また、災害ボランティアに限らず、増加傾向にある外国人旅行者への外国語を用いた観光ボランティアや東京オリンピックの運営スタッフ等、日本各地で様々な形態のボランティアが必要とされ、ボランティア活動への期待は大きい。

一般的にボランティア活動とは「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」とされ、活動の性格には、「自主性(主体性)」、「社会性(連帯性)」、「無償性(無給性)」等が挙げられている<sup>1)</sup>。しかし、活動時の交通費や食費等の実費、金銭や記念品等の謝礼を受け取る有償ボランティアも存在する。また、ボランティア団体と類似する団体の形態として、法人格を有する非営

利団体(NPO)や地域運営組織のような地縁に基づく団体も存在し、これらを明確に区別することは難しい。さらに、活動内容は、障害者・高齢者への生活支援や被災地域への支援活動、観光案内、清掃活動、防犯活動等多岐にわたり、ボランティアについて明確な定義を行うことは容易ではない。そこで本研究では、これらのボランティア団体、非営利団体、地域運営組織を総称して「市民組織」とする。

市民組織の活動は、人口減少、高齢化、自然災害リスクといった課題を抱える地域社会において不可欠であるものの、組織そのものが資金や人材の不足を抱える場合が多い。地域運営組織に対するアンケート調査<sup>2)</sup>によると、組織が継続的に活動していく上の課題として「活動の担い手となる人材」、「活動資金」、「地域住民の当事者意識」の不足が指摘されている。

これらを踏まえると、人々の市民組織への継続的な参画を促す必要がある一方で、資金不足を抱える組織が多い実態を考慮すると、報酬による外的動機付けは難しく、その他の参画を促す仕組みが必要である。例えば、「生きがい」や「社会貢献」といった内的動機を喚起する方

法である。しかしながら、多様な市民組織が存在する中で、人々がどのような種類の動機に基づいてそれぞれの活動に参画しているのかは明らかではない。そこで本研究では、市民組織の活動内容や形態の違いによって生じる参加動機の違いを明らかにすることを目的とする。具体的には、ボランティア団体、非営利団体、地縁団体にアンケート調査を行い、活動参加者の参加動機を解析することによって、動機に着目した各団体の参加者の構成を明らかにする。

## 2. 本研究の位置づけ

### (1) 既往研究のレビュー

ボランティア活動に関する研究の例として、活動の参加動機や継続要因を対象とした研究がある。桜井<sup>2)</sup>は、京都市内のボランティア団体、非営利組織に所属するボランティアに対しアンケート調査を実施した。質問項目の作成にあたっては、動機の構造に関する代表的なモデルであるVFI (Volunteer Functions Inventory) モデルを網羅している。27の参加動機項目に対し因子分析を行った結果、「自分探し」、「利他心」、「理念の実現」、「自己成長と技術習得・発揮」、「レクリエーション」、「社会適応」、「テーマや対象への共感」の7種類の参加動機因子を抽出した。さらに、個人属性やボランティア活動への参加形態と因子得点に着目し、参加動機の構造の差異をF検定によって分析した。その結果、年齢層、職業、活動対象分野、過去の活動経験の有無、活動歴について参加動機の構造に差異があることが明らかになった。また、桜井<sup>2)</sup>は、ボランティア活動の継続要因を明らかにするために、年齢層毎の参加動機を分析している。前述した研究データを用い、抽出された7種類の参加動機要因と個人的要因、状況への態度要因を変数とした重回帰分析を行った。その結果、参加者はボランティア活動を通して、自己効用感、業務達成による充足感、集団一体感などを得ることを期待しており、年齢層によって求めるものの違いがあることを明らかにしている。ボランティア参加者の満足感については、参加動機との関係を分析した研究もある。坂野ら<sup>3)</sup>は、ボランティア協議会に加入しているボランティアに対しアンケート調査を行い、構造方程式モデリングを用いて個人属性と参加動機の関係と、参加動機、ボランティア利益、ボランティア満足感の関係を分析している。その結果、個人属性は活動への参加動機に有意な関連性はみられなかった。参加動機と満足感には有意な関連性はないものの、参加動機はボランティア利益を経由し、間接的に満足感に影響を与えることを確認している。

ボランティア活動によって得られる効果に着目した研

究として、妹尾<sup>4)</sup>は福祉系専門学校生に対しアンケート調査を実施した。ボランティアから得られる「援助成果」を「援助効果」と「社会効果」の2種類に分け、援助成果の構造を分析している。活動を経験した得た援助成果の17項目に対して因子分析を行った結果、「自己報酬感」、「愛他的精神の高揚」、「人間関係の広がり」の3種類の因子が抽出された。これら3つの援助成果と援助効果と社会効果の関係を重回帰分析により明らかにしている。その結果、ボランティア活動継続の動機付けには、3種類の援助成果の全てが有意な影響を及ぼすことが明らかになった。

以上より、ボランティアの参加動機の分析では、年齢層や参加者がボランティアに期待する成果に着目しており、さらに参加動機と継続要因の解明が重要であることも分かる。

### (2) 本研究の位置づけ

既往研究では、参加者個人の参加動機や活動継続の要因に関して研究が行われてきた。しかし、ボランティア団体・非営利団体・地縁団体などの複数の組織に着目し、その比較から特徴を分析した研究は極めて少ない。組織の持続性に対する施策を検討するためには、組織の構成員の特性を把握する必要があると考えられる。本研究では、組織の活動内容や形態の違いによって生じる構成員の参加動機の特徴を把握する点に新規性がある。本研究では、複数の市民組織に対してアンケート調査を実施し、参加動機の特徴を明らかにする。

### (3) 調査対象とする組織の概要

本研究では、活動形態が異なる4つの市民組織を取り上げる。ボランティア団体としてHello! Hiroshima Project、非営利組織としてひろしまジン大学と西中国山地自然研究会、地縁組織としてまちづくり大山を対象とする。まちづくり大山は10種類の活動を行っており、それぞれの活動目的や構成員が異なるため、活動ごとの参加動機を明らかにする。

## 3. 手法

### (1) 分析手順

複数の組織あるいは活動への参加動機に関するアンケート調査結果に対し、1) 因子分析、2) 自己組織化マップ、3) クラスタ分析の3つの分析方法を適用し、組織別の参加者の動機の特徴を明らかにする。

アンケート調査では、参加動機に関する複数の項目を設け、因子分析により参加動機の特徴を抽出する。次に、因子の関係を可視化するために自己組織化マップを適用

表-1 ボランティア団体・非営利団体へのアンケート

調査名	「団体名」のボランティア活動に関するアンケート		
調査期間	2018年9月13日～10月1日		
調査対象団体	活動名	団体形態	回答数
	Hello!Hiroshima Project	ボランティア団体	60
	ひろしまジン大学	非営利団体	36
	西中国山地自然研究会	非営利団体	28

表-2 地縁団体に対するアンケート

調査名	まちづくり大山アンケート		
調査期間	2018年10月1日～10月25日		
調査対象活動	活動名	団体形態	回答数
	防災研修会	地縁団体	33
	健康を語る会	地縁団体	17
	コーカラ健康塾	地縁団体	8
	おたすけ隊	地縁団体	10
	フリーマーケット	地縁団体	14
	花盆市	地縁団体	19
	ウォーキング	地縁団体	20
	運動会	地縁団体	148
	各種スポーツ大会	地縁団体	38
公民館のサークル活動	地縁団体	37	

し、潜在的因子の情報を反映した二次元マップの作成を行う。最後に、クラスター分析を用いて二次元マップを特徴ごとのエリアに分類し、自己組織化マップを複数のグループにセグメントする。

## (2) アンケート調査

2018年9月から10月にかけて、広島県内のボランティア団体と非営利団体の3団体、および鳥取県西伯郡大山町の地縁団体の1団体を対象とし、アンケート調査を実施した。実施概要を表-1と表-2に示す。活動の参加動機に関する13の回答項目を設けた。この13項目は桜井<sup>3)</sup>の設問を参考にした。参加動機の回答項目を表-3に示す。アンケートでは、回答者の性別、年齢といった個人属性についても尋ねている。

## (3) 参加動機の分析

### a) 因子分析

アンケートにおける13項目の参加動機には相互依存性が存在すると考えられる。そこで、これら13項目の参加動機に関する共通した特性を抽出するために因子分析を適用する。因子数の決定についてはVSS基準を、因子の

表-3 参加動機の回答項目

1	自分の生きがいを見つけない
2	活動場所が自宅から近い
3	時間があつた
4	他人や社会の役に立ちたい
5	新しい知識・技能を習得したい
6	自分の能力(技術力や体力)を向上させたい
7	自分の技能・経験を活かしたい
8	新しい知人・友人を見つけない
9	地域の人と交流したい
10	友人・知人の誘い
11	参加するようにお願いされた
12	活動内容に興味があつた
13	活動の理念や目的に共感した

解釈のための回転数についてはジオミン直行回転を用いる。ここで、VSS基準とは、因子分析によって得られる回転後の因子負荷行列から相関行列を計算し、元の観測変数間の相関行列とのズレを指標化して適切な因子数を決定するものである。

### b) 自己組織化マップ(SOM)

因子分析によって抽出された因子の因子得点を用いて自己組織化マップを用いた2次元マップの作成を行う。自己組織化マップ(Self-Organizing Map, SOM)とは、Kohonenによって考案された高次元データを主に二次元平面上や三次元球体上に非線形写像するデータの解析手法の一つである<sup>7)</sup>。SOMはクラスターへの分類と射影操作の両方を同時に行うことができる点、高次元データを似たものは近く異なるものは遠くに順序良く配置できる点において優れている。

本研究では、活動参加者*i*に対する参加動機の因子*m*の因子得点( $x_{i1}, x_{i2}, \dots, x_{im}$ )を、自己組織化マップの入力値とする。自己組織化マップでは、マップの大きさとノードの配置、学習回数を分析者が定める必要がある。本研究では、分析結果が特徴的に算出され解釈が最も容易となるようにマップの大きさ、ノードの配置方法、学習回数を検討し、マップの大きさを26×18、ノードの配置を蜂の巣状、学習回数を234,000回としたときの結果を用いることとした。

### c) クラスター分析

生成された自己組織マップの各ノードはサンプルの特徴量、すなわち参加動機の因子に対する因子得点をもつ。各ノードの因子得点に対しk-平均法を適用し、自己組織化マップを複数のエリアに分類する。

表-4 各観測変数の因子負荷量

回答項目【略称】	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	因子8
生きがいを見つけない【生きがい】	0.725	0.011	-0.028	-0.017	0.684	0.007	0.019	-0.028
自分の技能・経験を活かしたい【活用】	0.769	-0.031	-0.020	-0.022	-0.631	-0.049	0.028	-0.001
新しい知識・技能を習得したい【習得】	0.357	0.111	0.075	0.146	-0.036	0.230	-0.049	0.065
参加するようにお願いされた【依頼】	-0.217	-0.114	-0.023	-0.100	0.041	-0.033	0.039	-0.158
活動内容に興味があった【興味】	0.210	0.931	0.005	0.040	0.064	0.149	0.025	0.013
活動の理念や目的に共感した【共感】	0.096	0.380	0.047	0.039	-0.069	0.007	0.087	0.199
友人・知人の誘い【勧誘】	-0.034	0.030	0.994	-0.051	-0.006	0.033	0.041	-0.001
自分の能力（技術力や体力）を向上させたい【向上】	0.357	0.058	-0.043	0.927	0.008	0.045	0.017	0.024
新しい知人・友人を見つけない【交友】	0.461	0.073	0.018	0.036	0.041	0.802	0.025	0.007
地域の人と交流したい【交流】	-0.005	0.082	-0.017	0.018	0.075	0.186	0.063	0.132
活動場所が近い【近所】	0.124	0.095	0.075	0.094	-0.014	0.006	0.458	0.123
時間があつた【時間】	0.087	0.158	0.016	-0.023	0.006	0.054	0.507	-0.066
他人や社会の役に立ちたい【貢献】	0.305	0.068	-0.024	0.068	-0.033	0.055	-0.013	0.418
固有値	1.801	1.092	1.006	0.913	0.887	0.766	0.487	0.282
寄与率	0.139	0.084	0.077	0.070	0.068	0.059	0.037	0.022
累積寄与率	0.139	0.223	0.300	0.370	0.438	0.497	0.535	0.556

表-5 因子の名称

因子1	能力を活かせる生きがい探し
因子2	活動に対する興味・共感
因子3	他者からの勧誘
因子4	自身の向上
因子5	新たな生きがい発見
因子6	新たな出会い
因子7	余暇の充実
因子8	地元貢献

#### 4. 分析結果

##### (1) 因子分析による参加動機の抽出

分析の結果、適切な因子数は8因子、累積寄与率は55.6%となった。結果を表-4に示す。各因子について大きな影響力を持つ項目を網掛けとしており、網掛けの色が濃いほど、値の絶対値が大きいことを示す。ここで、因子1については「生きがい」、「活用」、「習得」に関する値が正、「依頼」に関する値が負であることが見てとれる。第1因子は、生きがいを見つけない、自分の技術を活用したい、新しい技術を習得したい、地域のために貢献したいなどの、自発的な参加動機であることが考えられる。そこで、因子1については「能力を活かせる生きがい探し」と名付けた。同様に、因子2から因子8まで名付けた結果を表-5に示す。最も寄与率が高い第1因子は代表的なボランティア参加動機を表しており、その他の特徴的な参加動機を因子2から因子8が表現していることが明らかとなった。

##### (2) 自己組織化マップによる参加動機の可視化

参加者の8つの因子の因子得点を特徴量として、26×18のサイズの自己組織化マップを作成した。結果を図-1に示す。合計468個のノード全てについて8つの属性値をもつレーダーチャートが示されており、各ノードの8因子に対する値の大小関係が示されている。例えば、マップ右上部では因子3のみが高い値を示しており、中間上部では因子2が、右中央部では因子4が、その下では因子5と因子6が、さらにその下では因子7の影響が大きいことが見てとれる。このように特徴的な因子が順番に変化していくことが分かった。以上より、8つの因子得点に基づいた各ノードの特性が明らかになった。

各ノードを構成する因子得点に対し、k-平均法を適用し、ノードを複数のグループに分類した。結果を図-2に示す。各グループに含まれるノードから、各因子の因子得点の平均値を算出した結果を表-6に示す。なお、各グループについて大きな影響力を持つ項目を網掛けとしており、網掛けの色が濃いほど、値の絶対値が大きい。グループ別の特徴を表-7に示す。

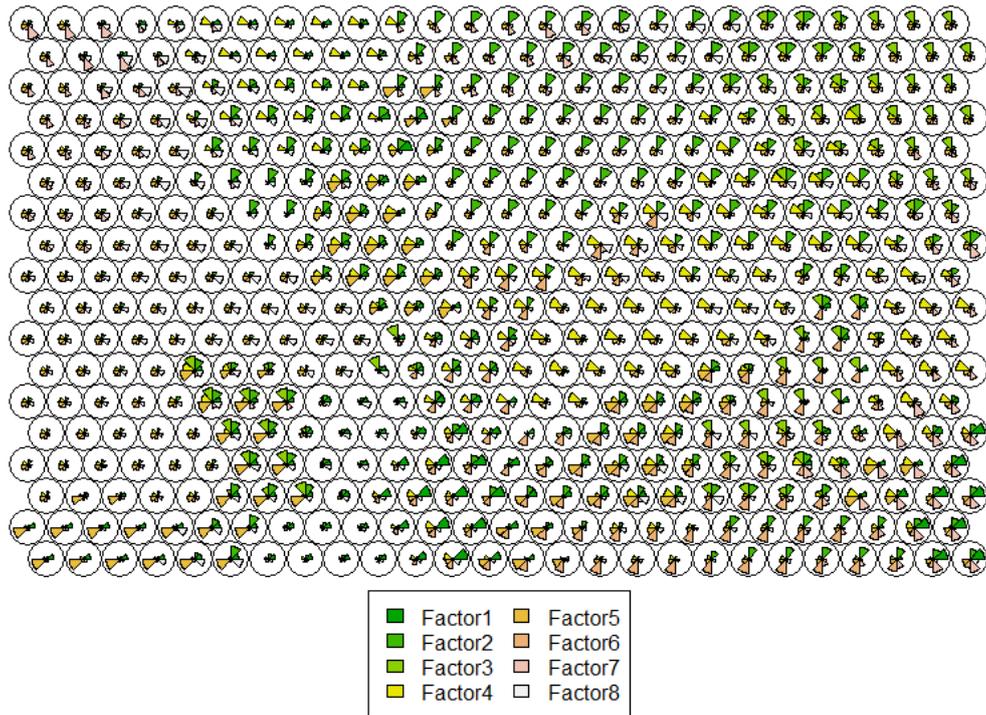


図-1 自己組織化マップ

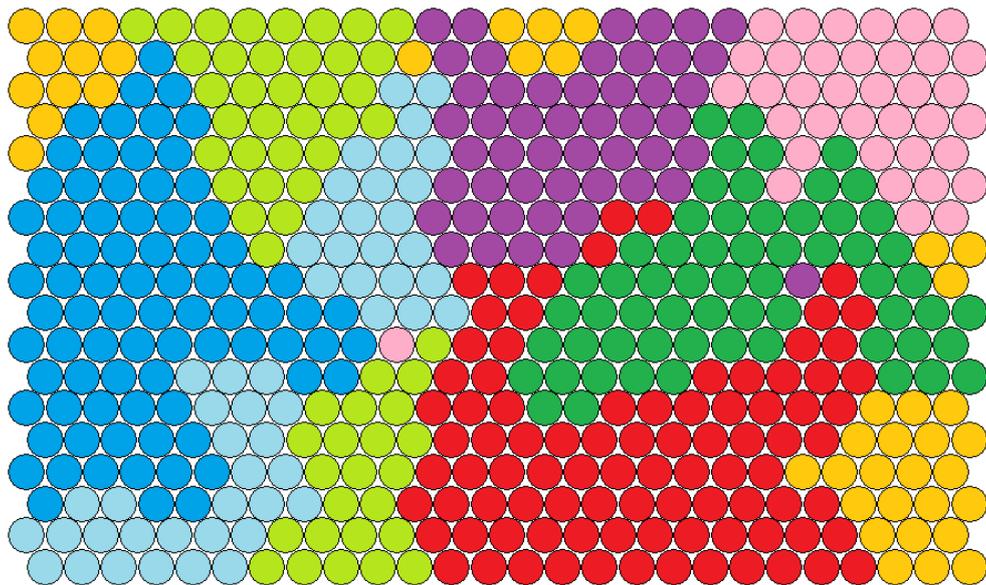


図-2 k-平均法によりグループ分けされたマップ

グループ1 (赤色) は、能力を活かせる生きがい探しという参加動機を持っているが、特に新しい出会いが欲しいという動機が強い参加者のグループである。

グループ2 (緑色) は、自身の技術力や体力の向上を目的にボランティア活動に参加している人で構成されるグループである。

グループ3 (青色) の主なボランティア活動の参加動機は、活動に対する興味・共感、他者からの勧誘、自身の向上というよりは、地元貢献である。

グループ4 (紫色) は、活動に対する興味・共感を持

ち、活動に参加している参加者のグループである。

グループ5 (桃色) は、他者から勧誘されたことによりボランティア活動に参加を決めた人で構成されている。

グループ6 (橙色) は、余暇を有効に活用し、生活を充実させたいという思いで、ボランティア活動に参加している人々のグループである。

グループ7 (黄緑色) は、因子1 (能力を活かせる生きがい探し) において正の影響を受け、因子5 (新たな生きがい発見) において負の影響を受ける。因子負荷量において因子1と因子5の両方で「生きがい」が正の値

表-6 各グループに含まれるノードの因子得点の平均値

	グループ番号：配色							
	1：赤色	2：緑色	3：青色	4：紫色	5：桃色	6：橙色	7：黄緑	8：水色
因子1：能力を活かせる生きがい探し	1.059	-0.376	-0.478	-0.428	-0.380	0.933	1.529	1.508
因子2：活動に対する興味・共感	0.248	0.287	-0.458	1.814	0.224	0.273	0.137	0.541
因子3：他者からの勧誘	0.321	-0.014	-0.392	-0.391	2.596	-0.117	-0.135	0.401
因子4：自身の向上	0.014	2.106	-0.348	-0.372	0.075	0.106	0.208	0.042
因子5：新たな生きがいの発見	0.159	-0.001	0.005	0.004	-0.019	0.150	-1.714	2.136
因子6：新たな出会い	2.537	-0.020	-0.086	-0.136	-0.240	0.238	-0.946	-1.293
因子7：余暇の充実	-0.212	0.185	0.227	-0.015	0.183	3.221	-0.159	-0.129
因子8：地元貢献	0.136	0.373	0.920	0.011	-0.030	-0.317	0.274	0.065

表-7 各グループの特徴

グループ	特徴	グループ	特徴
1 (赤色)	地域との交流, 能力を活かせる生きがい探し	5 (桃色)	他者からの勧誘
2 (緑色)	自身の能力向上	6 (橙色)	余暇の充実
3 (青色)	地元貢献	7 (黄緑色)	能力を活かした地域貢献
4 (紫色)	活動への興味・共感	8 (水色)	生きがい探し, 地域交流は重要でない

であった。また、因子1では「活用」が正の値であり、因子5では負の値を示していた。そのため、生きがいを見つけないというよりは、自分の技能を活かしながら地域に貢献したいという理由でボランティア活動に参加している人のグループである。

グループ8 (水色) は、能力を活かせる生きがい探しを求めている。また、新しい生きがいを発見したいという因子の影響も強く受けているため、生きがいを発見したい人々のグループである。

### (3) 組織別の参加動機の特性

各団体・活動別に参加者がグループに属する割合を表-8に示す。以下では、各団体・活動の参加動機の特性について考察を行う。Hello! Hiroshima Projectは、グループ7 (黄緑色) に属する参加者の割合が31.67%と最も高く、次いでグループ2 (緑色) の割合が高い。他団体・活動と比較すると、グループ7 (黄緑色) の割合が顕著に高いことがわかる。ここでグループ7 (黄緑色) は、自身の持つ技能を活かして地域に貢献したいという能力活用を参加動機にした参加者が属するグループである。Hello! Hiroshima Projectは英語技術を用いて外国人旅行者と交流し、広島市の魅力を伝えるというボランティア活動である。そのため、新しいことにチャレンジしたいというよりも自身の技術や知識を活かし、地域に貢献したいという参加者が多いことは直感に即した結果であるといえる。言い換えると、Hello! Hiroshima Project以外の団

体・活動では、このような能力活用を目的とした参加者の割合が低いといえる。

ひろしまジン大学では、グループ1 (赤色) の割合が47.22%と非常に高い。これは、地域交流・能力・生きがいを参加動機とした参加者である。次に高いのは、25.00%を占めるグループ4 (紫色) である。これは、活動に対する興味・共感である。ひろしまジン大学では、まちづくりに関するワークショップや広島を舞台とした歴史・文化学習を行う団体であり、広島を知り広島を良くしたいという活動内容や活動理念が参加者を集めている大きな要因と考えられる。

西中国山地自然研究会はグループ5 (桃色) の割合が他と比べて高い。これは他者からの勧誘であり、ひろしまジン大学同様、活動に対する興味・関心で参加している人も多いが、それ以上に他者に誘われて参加している人が多いことが特徴といえる。

まちづくり大山の地域活動すべてに着目すると、グループ3 (青色) のグループにおいて10個の活動のうち9つの活動で参加者の割合が最も高いことがわかる。地縁団体であるまちづくり大山の参加者は地元貢献したいという人が多いことがわかる。

まちづくり大山の各活動に着目すると、防災研修会と運動会においてグループ3 (青色) の割合が60%以上である。防災研修会では町を守りたい、町の人々を救いたいという意思があると考えられ、地元貢献したいという参加者が多いことは直感に即した結果であると考えら

表-8 各団体、活動の参加者が各グループに属する割合

	1：赤色	2：緑色	3：青色	4：紫色	5 桃色	6：橙色	7：黄緑	8：水色	
Hello! Hiroshima Project	11.67%	25.00%	5.00%	6.67%	3.33%	5.00%	31.67%	11.67%	100.00%
ひろしまジン大学	47.22%	0.00%	2.78%	25.00%	8.33%	8.33%	2.78%	5.56%	100.00%
西中国山地自然 研究会	3.57%	7.14%	17.86%	25.00%	28.57%	0.00%	10.71%	7.14%	100.00%
防災研修会	3.03%	3.03%	63.64%	15.15%	3.03%	0.00%	12.12%	0.00%	100.00%
健康を語る会	17.65%	5.88%	29.41%	17.65%	5.88%	5.88%	5.88%	11.76%	100.00%
コーカラ健康塾	25.00%	37.50%	12.50%	12.50%	12.50%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
おたすけ隊	0.00%	0.00%	50.00%	0.00%	20.00%	10.00%	10.00%	10.00%	100.00%
フリーマーケット	21.43%	0.00%	57.14%	14.29%	7.14%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
盆花市	5.26%	0.00%	63.16%	15.79%	15.79%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
ウォーキング	20.00%	20.00%	20.00%	15.00%	5.00%	0.00%	5.00%	15.00%	100.00%
運動会	2.03%	4.73%	67.57%	6.08%	8.11%	5.41%	3.38%	2.70%	100.00%
各種スポーツ大会	0.00%	13.16%	44.74%	5.26%	15.79%	2.63%	7.89%	10.53%	100.00%
公民館の サークル活動	10.81%	8.11%	35.14%	8.11%	8.11%	10.81%	8.11%	10.81%	100.00%

れる。また、運動会では地元への貢献として地元の運動会を盛り上げたいという目的を持った人が多いと推測される。

健康を語る会に着目すると、グループ3（青色）に属する参加者は29.41%であり、グループ1（赤色）とグループ4（紫色）の割合は約20%となった。また、すべてのグループにおいて参加者が確認された。地元への貢献や活動への興味・共感を持った参加者が多いが、様々な動機を持った参加者によって構成された活動である。

コーカラ健康塾では他の地域活動とは異なりグループ2（緑色）に属する参加者の割合が高い。グループ2（緑色）は自身の能力向上を目的としたグループである。コーカラ健康塾は健康維持や認知症予防などの活動を行っているため、自身の体力の向上を目的とした参加者が多いと推測される。

フリーマーケットに着目すると、グループ3（青色）の割合が60%に近い値となっている。自身に不要となったものを再使用してもらうことが、環境や社会に貢献できることにつながると考えられるため、グループ3（青色）に属する参加者が多いと推測される。

花盆市ではグループ1（赤色）とグループ3（青色）、グループ4（紫色）、グループ5（桃色）に属する参加者のみで構成されている。地元との繋がりや地元への貢献を目的として参加している人たちが構成されている。

ウォーキングでは生きがいを探すことを目的としたグループ1（赤色）とグループ8（水色）に属する参加者の割合が高いことから、生きがいを探すことを目的とする参加者が多いことがわかる。

各種スポーツ大会ではグループ3（青色）についてグループ5（桃色）に属する参加者の割合が高い。地域貢献を目的とする参加者が最も多いが、他者からの勧誘による参加者も多いことがわかる。

公民館のサークル活動に着目すると、すべてのグループにおいて参加者が確認された。そのため健康を語る会と同様に、様々な動機を持った参加者によって構成された活動であることがわかる。

#### (4) 考察

地縁団体であるまちづくり大山の地域活動の参加者は、主に「地元貢献」を動機として参加していることが明らかとなった。自治体の補助的な役割や地域コミュニティを形成する上で重要な役割を果たしてきた地縁団体において、地元地域のために活動を行う姿勢はとても良い傾向であると考えられる。しかし、活動団体別の参加動機の基礎集計結果では、Hello! Hiroshima Projectやひろしまジン大学などの非地縁団体においても、社会貢献を動機と持つ参加者が存在することが確認されている。特にHello! Hiroshima Projectでは過半数の参加者が社会貢献を動機に持つと回答している。よって、地縁団体の活動に参加している人は、Hello! Hiroshima Projectやひろしまジン大学の活動に参加している人に比べて、「地元貢献」を動機としている人が多いという結果は、これら地縁団体の活動参加者の「地元貢献」に対する意識が極めて高いというものではなく、「地元貢献」しか参加動機がないことが理由と考えられる。

Hello! Hiroshima Projectとひろしまジン大学の参加者は、

「生きがい探し」, 「自身の能力向上」, 「活動に対する興味・共感」, 「地域との交流」など, 「地元貢献」のほかに複数の動機を持っており, 利他的な参加動機だけでなく利己的な参加動機を持ち参加しているといえる。参加者に対しより活発的な参加を促すためには, 利他的な動機だけでなく利己的な動機を刺激する必要がある, 活動団体を活発化させてくれることが重要であることが本結果から示唆された。例えば, 分析対象とした地縁団体の活動を例にとると, 防災研修会やおたすけ隊は, 無論, だれでも参加可能ではあるものの, 専門的な知識や技能を有している人は特に重宝されると考えられる。こういった専門知識や技能を有している人が活動に参加し, そこで「生きがい」や「能力の向上」, 「新たな出会い」を実感できるような組織づくりや活動取り組みが, 今後, 持続可能な地縁団体を形成するために必要と考えられる。

## 5. おわりに

本研究では, ボランティア団体と非営利団体, 地縁団体といった複数の市民組織に着目し, 組織における参加者の参加動機の特徴を因子分析と自己組織化マップ, クラスタ分析を用いて明らかにした。分析の結果, 多様な参加動機に基づいて活動が行われている組織と, 参加動機が乏しい組織が存在することが明らかになった。

本研究では, 組織別に参加動機の比較を行ったに過ぎず, 活動の継続性といった組織の評価には至っていない。持続可能な組織の運営方法を検討するためには, 組織を評価するための指標を検討し, 定量化するための方法論を開発する必要がある。その上で, 本研究で明らかとなった構成員の特性と組織の持続性の関係を分析し, どのような参加動機を持つ構成員から成る組織において持続

可能な運営が可能なのかを明らかにすることは今後の課題である。

**謝辞:** 研究遂行にあたり, Hello! Hiroshima Project, ひろしまじん大学, 西中国山地自然研究会, まちづくり大山の皆様よりアンケート調査への協力を得た。また, データ分析にあたり最所桂史郎氏(当時, 鳥取大学工学部社会システム土木系学科)の助力を得た。ここに記して謝意を示す。

## 参考文献

- 1) 厚生労働省社会・援護局地域福祉課: ボランティアについて, [https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e\\_0001.pdf](https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf) (最終閲覧日 2018 年 10 月 22 日)
- 2) 総務省地域力創造グループ地域振興室: 地域運営組織の形成及び持続的な運営に関する調査研究事業, [http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000607339.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000607339.pdf), 2019. (最終アクセス: 2019.9.30)
- 3) 桜井政成: 複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析—京都市域のボランティアを対象とした調査より—, *The Nonprofit Review*, Vol.2, No.2, pp.111-122, 2002.
- 4) 桜井政成, ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異, *The Nonprofit Review*, Vol.5, No.2, pp.103-113, 2005.
- 5) 坂野純子, 矢嶋裕樹, 中嶋 和夫: 地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性, *The Journal of Tokyo Academy of Health Sciences*, Vol.7, No.1, pp.17-24, 2004.
- 6) 妹尾香織: 若者におけるボランティア活動とその経験効果, 花園大学社会福祉学部研究紀要, 第 16 号, pp.35-42, 2008.
- 7) T.コホネン: 自己組織化マップ, 丸善出版, 2012.

(2019. 10. 4 受付)

## MOTIVES ON ACTIVITY FOR COMMUNITY

Madoka CHOSOKABE, Masashi KUWANO and Keishi TANIMOTO